

私の戦争体験

長崎県東彼杵郡波佐見町

徳永 繁夫

月日の経つのは早いもので、あの日からもう50年が過ぎてしまいました。私は昭和19年召集を受け入隊しましたが、病気のため除隊となり、前から勤めていた八幡市（北九州市）三菱化成黒崎工場動員部勤労課に勤務しておりました。

19年も末頃になると、外地ばかりか内地でも、戦況の悪化により、全国各地はもとより特に日本の心臓部と言われた四大工業地帯の一つである北九州方面には、日夜を問わず敵機の来襲が激しく警戒警報、空襲警報の連続でした。開戦当初の頃は警報の音を聞く度にピリピリしていましたが、時が経つに連れて横着になり、少しぐらいの敵機の来襲にはさほど驚かぬようになっていました。でもあの時のB17、B29の大編隊をもって、数回に亘る八幡製鉄所周辺の絨毯大爆撃の恐ろしさは忘れることができません。日本中が誰でもびっくりしたものです。四方の山々から空の敵機に向かって一斉に打ち上げる対空放火の物凄さと、敵機から投下される無数の大型爆弾の炸裂音が入り混じり、腸を「えりくり返す」ような悲痛さは、遭遇した人でないと筆舌には申し上げられません。大空襲以外にも、毎日のようにB29やグラマンの艦載機等による来襲は後を絶ちませんでした。たいした被害もなく最近では市民も空襲になれっこになり、甘く見くびっていたかもしれません。この心の緩みが後日起こる8・8八幡市大空襲時の被害拡大の一因になったかもしれません。内外の戦況は好転するどころか一層悪化の一途をたどる一方です。軍部や政治家、工場の指導者は戦局の立てなおしに躍起になり、戦意向上と敵愾心奮起のため『鬼畜米英撃ちてし止む』『地球より大和民族抹殺』『本土決戦一億総戦死』『我等断じて祖国を守れ逃れる者こそ国賊ぞ』等の勇ましい標語を作り、市内や工場内に貼り出し、愛国心の高唱と増産意欲の効果をねらって国民に向かって大ラッパを吹き始めたのです。

20年に入りますと戦局は愈々苦境に落ち込み、フィリピン、沖縄と相次いで失い、国民は軍部や政治家の意志とは裏腹に希望を失って行くばかりでした。加えて軍需資材は欠乏し、人民の食糧さえ事欠く状態におい込まれていました。時局は一日如に急を告げ、南方のテニヤン、サイパンを基地としたB29による大編隊は連日東京、大阪、名古屋の大都会を焼夷弾攻撃によって灰燼と化し、全日本の都市は毎日地上から姿を消していました。

8月6日、その時国民が思ってもいなかった原子爆弾を世界で初めて広島に投下したのです。当時の新聞には「6日アメリカ軍が広島に新型爆弾を投下したが被害は微小」と発表されました。当時の国民は、誰でも終戦まで原子爆弾がある事さえ知らずにいたのです。

広島に原爆が投下された2日後、八幡市民にとって終生忘れることの出来ない運命の悪魔の日が来ました。その日は8月の8日、忘れもしない真夏の朝の6時半頃、もう日の出の時刻です。その時、警戒警報が鳴ったのです。いつもの通りと思って気にも止めずにいたら、当日は

平日とちょっと違っていました。通常なら敵機の進路や機数を刻々教えてくれるラジオの情報が全く入って来ません。2時間たっても音沙汰なしです。警報もその儘でしたが市民も此の頃はなれっこになり、警報の解除も待たずに国道も市道も車や電車、自転車や人で普通の日と変わらぬ有様でした。当日は私も体調をくずしていたので休日を取り、友人と2人で市内の病院へ電車で行くことにしました。私が受診を終え控え室に入り、友人が受診している時でした。周辺には工場があり、国道が近くにあるため雑音がひどくはっきりした音は聞きとれなかったのですが、窓ぎわを見ると白い煙が立ち昇っていました。よく見ると焼夷弾が落ちて、真白な煙を噴き出しているではありませんか。全くビックリしました。さあ大変です。そこで大声を張り上げ「焼夷弾落下、焼夷弾落下」と何回も病院内に向かって叫びました。院長先生、看護婦さんが一大事に気付き、真先に入院患者、通院の人々を手別けして地下の防空壕や2階3階の階段の下に順次避難させられました。私と友人は階段の下に一時避難していましたが、間もなく目の前に焼夷弾が落下して煙をふき始めました。私はドキドキしながらも廊下の隅にある防火水槽の水を頭から2、3杯をかぶり、横に積んであった砂袋を取り、煙を噴き出している焼夷弾に向かってなげつけ、消火に成功しました。未だくすぶっている焼夷弾を見つけては4発は消し止めましたが、もう砂袋がありません。そのうちにあっちでも、こっちでも音を立てながら焼夷弾が落下してきて手におえません。焼夷弾は未だ白い煙を噴いているうちなら砂袋をかけて消火できますけど、一度爆発したら1300度の高温を出し何もかも焼きつくさずにはおきません。人の手で消火することはできません。院内は見る見るうちに煙と火の海になりました。私達は看護婦さんと協力して患者さんの手助けや消火活動をしてきましたが、もうこの上室内にいたら危険です。水槽の残りの水で全身をぬらし手拭いもぬらしました。バケツの底でガラス戸をたたき破り、看護婦共々戸外に逃れ出ました。

外に出て見ると、今のところ炎を出して燃え上がっている家はところどころしかありませんが、大部分の家が室内で燃え盛っているため全市が煙のうずで目も明けられない状態です。真日中と言うのにもう日没時のような暗さです。人々は唯もくもくと暗やみの中を燃え上がっている焼夷弾の明りをたよりに、行く先も判らぬまま夢遊病者のように町中をさまよい歩くうちに、ある広場にたどりつくことができました。この広場には軍需資材の木材が山と積んで有ったのに火がつき、炎は風におおわれて地面をはいずり回り、灼熱地獄のような熱さでとても長くはおられません。

ちょっと行ったところに怪我か身体が悪いのか歩くことができずうずくまっている娘がいました。人々を見ると16で死なんまんじゃろうか「助けて下さい」と泣き叫んでいましたが、各人自分自身に死が迫っている現状ではどうすることもできませんでした。この先助かるメドさえない生死の境をさまよいつづけている唯今でした。

刻々と時が経つにつれいよいよ火勢はつのもり、全市は火の海と化して強風が荒狂い、熱風が全市を包み込み、この世の終末かこの世の地獄を見るようでした。燃え盛る火の中をくぐり抜け、何度となく前方の道をふさがれ、上からは落下物で危うく命を落すところを何秒かの差で、

危機一髪の幸運に九死に一生を得ることができました。

とうとう死線を越えて安全な横穴の防空壕にたどり着いた時にはもうヘトヘトでした。病院を抜け出してから何時間経っていたでしょう。一生のうちで一番長かった時間だったと思っています。防空壕内に入って見ると、全身火傷の人や上半身火傷で腹水がたまり大きな水袋をブラ下げた人、下半身焼きただれた人、手足や頭等の怪我、火傷等でウンウンうなっている人々を見るにつけ、怪我一つせず無事であることが不思議のようでした。友人もこのままならすでに命なきところを消防団員に助けて頂き、無事再会することができました。

全市がほとんど燃えつきた頃を見はからって外に出て見ましたが、どうしてどうして家の残火が赤々と燃えていて、とても外出はできない状態です。それから幾時間経ったでしょう。もう夕方近くになりましたので友人と外に見てビックリしました。不意打ちをくらったために、国道では電車、自動車、自転車はそのまま焼け落ち、人間にいたっては着物も靴も何もかも焼け失せ、男、女の区別さえ見わけのつかない程の真黒こげになり、道々や軒場の下で幾十、百、千人の人々が無残な姿をさらけだしていました。ただ呆然とするばかりでした。後で聞いた話では、敵機はあらかじめ情報攪乱と電波妨害を兼ね、錫で作った薄い金板を空中からたえず散布していたため、ラジオの電波が攪乱され情報がわからぬ間に突然敵襲に会い、なすすべもなく、かくも多数の尊い人命の犠牲者を出すはめになったとのこと。また、一説には、敵機は高度よりエンジンを止め爆音を消して空中滑走で八幡上空に侵入したと言う人もいますが、真実のことはわかりませんが、そう言えば爆音を聞かなかったこともうなずけます。国道が未だ熱くて通れないので、鉄道伝いに会社に帰ることにしましたが、鉄道も各所で枕木が焼け落ちたり、レールが焼夷弾の熱で溶けたり被害続出でした。

翌日9日は小倉が幸運にも曇天のため難を逃れ、一方の長崎では日本で2番目の「ピカドン」の悲運に見舞われてしまいました。それから約1週間後の8月15日待ちに待った、長かった太平洋戦争もやっと終わり、平和の日がやって来ました。

合掌